
呪われた少女の空

水無月なづき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われた少女の空

【Nコード】

N08720

【作者名】

水無月なつき

【あらすじ】

高校一年生になった冬城凜は美術部に入り、高月真夜と出会う。たった二人しか部員のいない美術部で、真夜の絵の才能はあまりにも秀でていた。

唯一の部活仲間である真夜を、凜は嫉妬と羨望の対象として意識していく。

「ねえ、凜。空を飛んでみたことはある？」

真夜はそんなことを聞いてきた。

「どういう意味？」

私は質問の意図がつかめなかった。

私たちは西日の差す美術室で二人つきりと一緒に机に向かって絵を描いていた。クロッキー帳を黒く塗りつぶすように、ざらざらとした紙面に黒鉛を走らせていく。

「例えば、ハンググライダーとかパラグライダーとか、あるいは気球や飛行船、飛行機だって間接的にだけどそこに乗っている人たちは空を飛んでいるわけだよ。そういう感覚って、味わったことがある？」

私は飛行機に乗ったことがなかった。他のどれも私の過去に当てはまるものはない。

「ないね」

放課後の美術室は閑散としていた。黒板には昼間にどこかのクラスで書かれたらしい黄色いチョークの文字が残されたままになっている。

「真夜は飛行機とか乗ったことあるの？」

窓辺の色あせたカーテンの隙間から細長い光が差し込んできて空中の塵を照らし出していた。

「あるよ」

廊下側の壁に沿って設置された棚には上級生が作ったらしい木彫りの魚やら鳥やら猫やらが並べられている。

「どんな風に？」

私は手を止め、隣に座っている真夜のほうを見て聞いた。

「田舎のおばあちゃん家まで行くときにね、一度だけ乗ったことがあるの。帰りは新幹線で帰ってきちゃったけどね」

真夜はページをめくり、真っ白なクロッキー帳を眺めながら話を続けた。

「飛行機ってさ、あれだけの大きさのものが飛ぶにはやっぱりすごくエネルギーがいるみたい。滑走路を何度もぐるぐる回って勢いをつけて、それからやっとのことで機体を浮かせて、空路に乗るの」
私はあの巨大な鉄の塊がどうやって空を飛んでいるのかにわか想像がつかなかった。

「飛行機が空を飛んでいるあいだは、なんだか別世界にいるみたいで不思議な気分だった」

真夜は鉛筆を持ち直すともものすごい勢いで何かを描き始めた。白紙の空間が徐々に形と奥行きを持ち始めていく。

「最初のうちはね、私たちの住んでる街が見えるの。低い位置からね。でも高度が上がってくると、どんどん地面は私から離れていって、なんだか知らない土地の地図を見下ろしてるような気分になる。飛行機の小さな窓から見えるぼんやりとした景色は、あまりにも遠すぎて、小さすぎて、まるで私とは関係のない世界なんじゃないかっていう気がして不安になるの」

真夜の描いた黒い線は飛行機の翼になり、雲になり、空になり、そして大地になった。大地の上に描かれる絵は、なんだか街ともいえず森ともいえないような、よく分からない模様になっていく。

「ねえ、凜」

真夜は手を止めて、ふーっと一息ついてから言った。

「空を飛んでみたいと思っただことはない？」

私はしばらく答えられずにいた。

「そりゃ、誰しも一度はそう思ったことがじゃないの。私もそう思う」

「どんな風に？」

真夜が私を見る。

「どんな風に空を飛びたい？」

奥二重の真夜の目はまるで私の願いを叶えてくれるみたいに思え

た。

「例えば？」

「箒に乗って魔女みたいに空を飛びたいとか、翼を広げて鳥みたいに空を飛びたいとか、あるいはタンポポの種みたいに風にゆらゆら舞うだけとかね」

私はちよつと考え込んだ。

窓の外から運動場で練習をしているソフトボール部の声とバットがボールを打つ音が聞こえる。窓から差し込む夕日に照らされて床には椅子と、机と、小さな埃と、それから私の影が伸びていた。色濃く伸びた影によって作り出されたその明暗のコントラストには、なぜだか不思議な寂しさがあつた。

「魔女……かなあ。でも箒は嫌だよ。お尻が痛くなるもん」

「何それ、変なの」

真夜と私はくすくすと笑った。

「あのさ」

しばらくして真夜が言った。

「明日、二人で一緒に空を飛びに行こうよ」

買い物にでも誘うみたいない方で。

私、冬城凜と彼女、高月真夜は同じ美術部の一年生だ。高校に入学して、美術部に入ってから半年ほどになる。私たちの他に部員はいない。今年私たち二人が入部しなければ、美術部は廃部になる予定だったらしい。だが、たとえ部員が一年生だけで二十人いようと、全学年合わせて私の他には誰一人いなくなるかと、私にとってはあまり関係のないことだった。私は最初から美術部に入ると決めていたのだから。

ところが、結果として今の美術部には私たち一年生二人しかいないことを考えると意外なことに、その日私が訪れた美術室には既に先客がいた。彼女は顧問の先生以外は誰もいない部屋で臆面もなく、

後からやってきた私を見て絶好のパートナーでも見つけたかのように言った。

「ここね、他に誰もいないんだって。あなたも一年生でしょ？ よろしくね」

それが彼女、高月真夜だった。

真夜との出会いは印象的だった。

真夜とはクラスが違うので普段はあまり顔を合わせることはないが、放課後になると彼女はいつものように美術室に顔を出した。そして真夜は大抵の場合、机にクロッキー帳を広げて、鉛筆でおびただしい数のデッサンをこなしていく。黒鉛で手の甲が真っ黒になるのも構わずに次々と鉛筆画を書き上げ、練りゴムは徐々に黒く染まっっていく、クロッキー帳のページはどんどん減っていった。

私は最初のうち、真夜がどんな絵を描いているのかあまり興味はなかった。しかし、いよいよキャンバスに下書きを済ませ、絵の具で色を塗り始めるようになった頃、私は彼女に対して異様なまでの執着心を持つようになった。

昔から私は絵を描くのが好きだった。特に色を塗るのが好きだった。クレヨンでも、クーピーでも、色鉛筆でも何でもよかった。たくさん色が並んでいるのを見るとそれだけでわくわくしたのを覚えてる。

だけど私はすぐに満足できなくなった。もっと多くの色を使いたいと思っていた。十二色や十六色ではどうしても限界がある。たくさん色鉛筆が並んでいるのを見ると必要な色は全て揃っているように思えるが、いざ色を塗り始めてみるとどうしても足りなくなってきたりする。私が塗りたいと思ってる色が、そこには存在しないのだ。そのときの私は、私が描きたいと思ってる絵が描けないのは色鉛筆の色が足りないからだと思っていた。

もっとたくさん色を使いたいという欲求は、絵の具を使うよう

になってから満たされるようになった。絵の具はすばらしい発明だ。好きな色を混ぜて、作りたい色を生み出すことができる。私はすぐに夢中になった。

中学に上がると私は美術部に入り、どんどん他の人の技術を真似していった。なかなか上手くいかないこともあったが、試行錯誤を重ね、徐々にではあるが今までより綺麗な絵が描けるようになるにつれて、自分でもだんだん自信を持ち始めた。他の部員や同級生から一目置かれるのは自尊心をくすぐったし、何より顧問の先生に褒められるのが嬉しかった。しかし私はそのときからなんだかそれが昔から自分が追い求めているものとは違っているような気がしていた。私の意識はいつもどこか違う、こうじゃないと違和感を訴え続けていた。

先生に相談してみたこともあったけれど、私はその違和感を言葉にすることができず、ただ相手を困らせるだけだった。他の人の絵と見比べてみて、何か見落としているところはないかと探ってみたこともあったが、どの絵からも私が求めているものは見つけれなかった。

結局、その違和感のことは忘れて、私は自分の好きな絵を描くことに集中することにした。私自身まだまだ稚拙な部分も多いと感じていたが、とりあえずのところ私は私なりの画風を獲得したと思っていた。

真夜と出会うまでは。

真夜は、頭の中に既に完成した絵が丸ごと入ってるんじゃないかと思うくらい絵を描くのが早かったし、キャンバスを前にしてもその速度は衰えなかった。

そして真夜がついに絵の具で色を塗り始めたとき、私は奇妙な既視感を覚えた。その絵は初めて見るはずなのに、まるで私が今までに描いたことがあるかのようにだった。

そこにあつたのはまさに私が追い求めていたものだった。私が表現したいと欲して止まらなかった、そしてついに得られることのなかった色使いを、真夜は自分のものにしていった。

私は嫉妬した。

同じキャンバスに描かれた絵でも、私の絵は凡庸に見え、真夜の絵は洗練されて見えた。私は、私が探し求めていた、私だけのものになるはずだった独自性を他の人に奪われているのが許せなかった。そして、それがよりによってこんなに身近にいる人だというのが悔しかった。だけど私は、ここで真夜の絵を見なければ私が私の絵に何を求めていたのかはずっと気づかぬままだっただろう。私が今まで見過ごしてきたものか、真夜はしっかりと見つけることができていたのだ。だから私は真夜に完全に負けたと思ったし、そんな自分に腹が立った。

私にとって真夜は、唯一の部活仲間でありながら、嫉妬と羨望の対象だった。だから私は、そんな真夜に対して気を許せずにしたのだけれど、不思議なことに真夜はどうやら私が気に入ららしい。

私たちの学校では、夏休みが終わるとすぐに文化祭の準備に取り掛かり始める。我々美術部では文化祭での出し物をどうするかという問題ですぐに頭打ちになった。伝統的にいえば、各部員の作品を展示するというのが通例だったが、今年に至っては部員がたった二人しかいないので、展示するほどの作品が集まらなかった。私は顧問の先生に相談して過去の部員の作品も一緒に展示させてもらうことにしようかと考えていたのだが、それを言い出す前に真夜がこんな案を出してきた。

「私、手品がやりたいな」

昼休み、部室で弁当を食べているときだった。この部屋は狭い上に日当たりがよすぎてカーテンを閉め切っただけでも暑苦しい。

「あ、ちゃんと絵の展示もやるよ？ でもそれだけじゃちょっと寂しすぎるでしょ。私が種も仕掛けもないような手品でお客さんをあっと驚かせればきつと新入部員も増えるよ」

私はちよつと部屋の温度が上がった気がした。部室にエアコンはついていない。

「新入部員の勧誘は春になってからやろうよ。大体、美術部なのに手品で部員増やしてどうすんの」

「なるほど。部員が増える手品ね」

「何か間違つてると思う……」

私はあまり乗り気ではなかったが、結局その案を採用した。あとになって考えると、私も私で真夜と二人で何か新しいことを始めるという状況を楽しんでいたのかもしれない。

真夜の手品は傍目から見ても見事なもので、どれもその場で始めて目にするものだった。私はそんな真夜の手品をサポートする役を担当したのだが、結局、手品の本質的なところには何も触れなかった。文化祭が終わってから、私は何度か真夜に手品の種を教えてもらおうとしたのだが、真夜は「種も仕掛けもないよ」と言うだけで結局はぐらかされるだけだった。

土曜日の朝。私は小高い丘の上にある公園で真夜を待っていた。もうだいぶ日が出てきていたけれど、まだ少し肌寒い。

そこは住宅街の一角の狭いスペースを使って無理して作ったみたいな幼児向けの小さな公園で、高校生の私が足を踏み入れるには少し抵抗があった。

中には背の低い滑り台と、ちよつとした砂場があるだけだ。私は入り口の小さな防護柵の上に腰かけた。

公園の入り口に面しているのは乗用車がやっと通れるくらいの私道で、反対側には塀を越えると民家がある。子供の声や掃除機をかける音がかすかに聞こえてくる。

空は綺麗に晴れていて、街路樹の葉の匂いを運んでくる乾いた風

が心地よい。

不意に、ちりんちりと風鈴みたいな音がした。自転車のベルだ。真夜がきたと思って私はあたりを見回した。だが人の姿は見えない。もう一度音が鳴る。私は上を見上げた。音が上から聞こえてきたような気がしたからだ。

気のせいではなかった。真夜はそこにいた。自転車に乗って、私の頭上数メートルのところに。

私は即座に立ち上がって身をかわした。真夜が上から落ちてくると思ったからだ。

だが真夜は落ちてこなかった。目の錯覚でなければ、真夜は自転車に乗ったまま空中に浮いていた。

「……真夜？」

私は目をこすった。待ち合わせに間に合うようにちゃんと起きて身支度をして家を出たというような夢を見るのはよくあることだ。

「おはよう、凜」

真夜は返事をした。どうやら彼女が私の知っている真夜であることは間違いないらしい。

「……何やってるの？」

「自転車で遊覧飛行」

真夜はペダルをこぎながら熱帯魚がひれで体を翻すように蛇行運転をした。空中でだ。真夜がハンドルを切るたびにシュシュで結わえた黒い髪が風になびく。

「どうやって浮いてるの？」

私は今にも真夜が浮力を失って落下するんじゃないかと思ってひやひやした。

「今日は空を飛べる日なんだよ」

答えになってない。

真夜が乗っているのはどう見てもただの自転車だったし、タイヤの中に空気の代わりに水素やヘリウムが詰まっていたとしても宙に

浮くのは難しい。

真夜は少しずつ高度を落とし、私の頭の上を通り過ぎ、公園の外に出て車道の上に降りた。前輪が地面に着くと後輪ががしゃんと音を立てて落下した。

「ほら、凜も乗ろうよ」

絶対に嫌だ。私は首を振った。

「危ないよ。いつ落ちるか分からないじゃん。大体どういう原理で浮いてるのかも分からないようなものに乗ってみたいとは思わないよ」

「じゃあ凜は飛行機がどういう原理で空を飛んでいるのか説明できるの？」

「えっと……」

私は答えに詰まった。

「ほらね。そんなもんでしょ？」

「でも」

「大丈夫だよ。私だって死にたいわけじゃないんだから、落っこちたりしないって」

不安は拭えなかった。たとえ真夜が意図せずとも、事故が起こらないとは限らない。

「こんな天気の良い日に空を飛ばないなんて損だよ」

真夜は夏の日差しのような笑顔で二本のバックステップを差し出してきた。

「ほら、今日だけだから。ね？」

怖いから嫌だ。別に高所恐怖症ってわけじゃない。シートベルトもエアバッグもない乗り物でヘルメットもかぶらずに空を飛ぶなんて危なすぎる。

「落ちたら恨むからね」

それでも私は好奇心には抗えなかった。やっぱりどんなものなのか味わってみたい。どうやって空を飛んでいるのかは分からないけれど、もしかしたら世の中にはまだ私の知らない原理があるのかも

しれない。私のイメージする航空力学とは別の原理が。

私は真夜の手からバックステップを受け取り、後輪に取り付けた。淡いブルーの自転車に真っ黒い鉛のアクセサリがくつつくとそれはちよつと不細工に見えた。私は後輪にまたがって荷台の上に座った。「しつかり捕まってるね」

私は言われるがまま、サドルに座った真夜の腰に腕を回す。なんだか恋人みたいだ。

「行くよ」

真夜がペダルに足を乗せた。私は地面を蹴った。勢いがつく。自転車が進みだす。

公園の前を横切るとそこはすぐに下り坂だ。細い私道は坂を降りきったところの広い車道まで続いている。

がくん、と引つ張られるような感じがした。下り坂ならこがなくてもいいのに真夜は思いつきりペダルを踏みしめる。落ちていくような感覚が怖い。

不意に、平板な道に出たかのような錯覚。

下り坂はまだ続いている。

離れていく地面。

浮いてるんだと私は思った。

上下にふらつくことはなく、見えない道が空中にあるかのように、自転車は確かに空の上を走っていた。

「浮いてる!」

私は思わず声を上げた。

足元を見る。眼下には二階から見下ろしたような距離感のある道路が続いている。

目線の高さが住宅街の家々の屋根を越えた。真っ青な空が一気に視界に広がっていく。蜘蛛の巣みたいに張りめぐらされた電線をかいくぐって街の中から抜け出すと、私たちはあらゆる障害物から解放された世界にいた。

様々な色と形の屋根が見える。臙脂色、薄いグレー、乳白色、深

いブルー。切妻屋根、方形屋根、流れ屋根、腰折れ屋根。瓦屋根と、そうでないもの。色も形もばらばらで、遠くに広がる景色はモザイク画を思わせた。

高度はぐんぐん上がっていく。アパートの上の給水タンクやスパーの屋上の駐車場など普段は目にするものがないものが見えてくる。

足元を見下ろすともう既に本来なら自分はあるに遠いところを歩いているんだという実感の湧かない高さには達していた。

いつもは見上げている信号、道路標識、電柱、チェーン店の大きな看板、どれもみなこの高さからだと低くうなだれて見える。背の高い街路樹もここから見るとポットの苗みたいだ。

最初のうち、高度が上がるにつれて大地も広がっていった。地平線の向こうからどんどん遠くの街の景色がせり上がってくる感じ。だけどそれもしばらくすると限界に達し、地平線は私たちを置き去りにして沈んでいく。丸い地表から私たちが遠ざかっていくのを感じる。

「ほんとに飛んでるんだね」

私は声に出して言った。今さら気づく爽快感。後に来るのは高揚感。不思議と恐怖はなかった。両腕で真夜の背中にしっかりと抱きついているからかもしれない。自分一人だけ宙に投げ出されることはないという安心感がある。

いつもはあんなに大きく感じていた道路も、所狭しと敷き詰められた建物の隙間を縫うようにしてかろうじて繋がっているだけだ。街の中で細い道と太い道が絡まり繋がりがあっている姿は、生物の教科書に載っているような人体の血脈を思わせた。普段歩きなれた道はそんな血脈のほんの一部分にすぎず、いつも思い描いているような特別な記号はなく、ここからだより大きなものに取り込まれて見えなくなってしまう。ここから見える街は、あまりにも私の歩いたことのない場所と、私の見たことない姿ばかりで構成されていて、それは私が頭の中でイメージしていた街とはまるで別の世

界だった。

「このまま海まで行ってみようか」

肩越しに真夜が言う。

「えっ？ 海？」

確かに私たちの住んでいる街は海に面した工業地帯ということになってはいるけれど、それは街全体を指したときにそう呼ぶのであって、今私たちがいるこの場所は街の中でも西側に位置し、海岸からはだいぶ遠い。

「海なんて普段あまり行かないでしょ？」

向かって正面のまっすぐ進んだところには、かなり遠くにだけれど県境の川を渡る橋が見える。

左には延々と広がる住宅街の中、山の斜面に階段状に作られた墓地があり、右には大森林を思わせる広大な自然公園が広がっていて、その手前には浄水場がある。

真夜はハンドルを切り、東に向かって進みだした。広大な緑地を越えると、今度は私たちの近所にあるのはまた別の墓地が現れた。これもかなり広い。街自体が大きくて、たくさんの人が住んでいるから、それに伴って墓地も大きくなっていくんだろうか。そう考えるとなんだか複雑な気分だ。

今日は天気がいいからか、かなり遠くの景色まで見ることができ。地平線の彼方には海に面した工場の気配があり、海に向かって私たちの左側をずっと流れる川の向こうには大都会の摩天楼の姿がうつすらと浮かんでいた。その手前で、川沿いに伸びる線路の上を電車が走っている。

「ねえ、凜」

眼下に広がる景色がだんだん私の知らない街並みになってきた頃、真夜が言った。

「空、青いね」

「そうだね」

たったそれだけの言葉だったけれど、私には真夜の言いたいこと

が伝わってきたし、真夜も私の気持ちがあつたと思う。地上から見上げる空の色と、空から見る空の色は確かに違っていた。

「どこまでが地球で、どこからが宇宙なのかな」

「大気のあるところまでが地球なんじゃないの」

私は西から運ばれてくる雲をぼんやり見上げながら言った。

「成層圏ってさ、高度が上がるといって気温が高くなってくんだって。普通は、高度が上がることによって気温は下がっていくんだけど、成層圏にはオゾン層があつて、それが太陽からの紫外線を熱に変えるせいで、暖かくなってるみたい」

真夜は話を続けた。

「バベルの塔が成層圏まで届いてたら、一日中ずっと雲のない晴れ渡った青空の中で、ほんのり少し暖かくて、きっと最高の居心地だっただろうね」

成層圏がほんのり暖かいなんて眉唾な話だったけれど、私は少しのあいだバベルの塔がもし崩壊せずにいたらどんな風になっていただろうかという想像を膨らませていた。

不意に、地平線の向こうに青いものが広がった。

「見えたよ」

海だ。

「さあ降りよう」

車体があくんと前に傾いた。

「ひっ」

背中あたりがざわっとする。

「落ちる！」

体が前に引く張られる。

「落ちないから大丈夫だって」

「もうやだ降りして」

地面が迫ってくる。

「今降りたら、たぶん死ぬよ？」

「いやああああ」

私は目を瞑ることにした。耳のそばで風音が鳴る。潮の匂いが近づいてきて、目を閉じていても海の気配を間近に感じた。真夜のお腹のあたりでぎゅっと握り締めた両手がじんわり汗ばんでくる。小さくて頼りないバックステップを土踏まずで必死に踏みしめる。

速度がゆつくり落ちていって、車体が後ろに傾くのを感じた。

もうほとんど水平に移動しているんじゃないかと思い始めた頃、目を開けてみるといつの間にか自転車は地面の上を走っていた。そこはどこかの公園の中みたいで、さっきまであんなに高いところにいたのが嘘みたいに周りの景色はすっかり地上のものとなっていた。木々に囲まれた公園の開けた場所で真夜はブレーキを利かせて自転車をとめた。

真夜がペダルから足を下ろして、自転車が少し傾く。私は一呼吸置いてから地面に足を下ろした。じやりつと砂を踏む感触。そんな時間は経っていないはずなのに、なんだかものすごく懐かしい。「帰ってきた！ 私は帰ってきたよ！！」

私はちよつと感動してそのまま自転車を降りると両手を挙げて声高に叫んだ。

「生きててよかったあ……」

はぁ、と私は盛大にため息をつく。

「大げさだなあ。帰りも乗るっていうのに」

「えっ」

束の間の安らぎはほんの一瞬で終わった。

「自転車どこにとめようかなあ」

真夜は自転車を押しながら公園の出口に向かっていく。私も後からついていく。真夜は全く土地勘がないように見えるけど大丈夫なんだろうか。私は大丈夫じゃない。

公園を出ると眼前にはもう海が広がり、海に沿って幅四、五メートルくらいの舗装された道が左右に伸びていた。公園側にはベンチがいくつか並んでいて、道の両端は海に面した側と同じように柵で

仕切られている。道というよりもほとんど公園の一部で、ただ海辺を前にしてベンチに座ってくつろぐためのスペースみたいな感じだ。左に伸びた道の端の柵の向こうには港があり、反対側には何故か車がぎっしりとまった駐車場が、そしてさらにその向こうにはやっぱり港が続いている。

私は柵からちよつと身を乗り出してすぐ真下の海面を覗き込んでみた。コバルトブルーの波が大きくて不気味な生き物の体の一部のように岸に打ち寄せている。

「太平洋だよ」

真夜が隣にきて言った。

「おつきいよね。なんで私たちが飲み込まれずにいられるのかが不思議なくらい」

色濃い海が視界の果てまで広がり、その上に大きな雲を浮かべた空が覆いかぶさっている。

「このまま海を越えていけばアメリカまで辿り着けるのかな」

私はぽつりとつぶやいた。

「ここからアメリカまでの距離はおおよそ八　キロ。時速二

キロの自転車で行くとすると四　時間かかるよ」

「四　時間って……何日？」

「二週間と二日」

「もしかして反対側からユーラシア大陸と大西洋を経由して行ったほうが近いの？」

「そんなことはないと思うよ」

「二週間……アメリカって遠いんだなあ」

私は海の向こうを見渡してみた。遙か遠く、海平線のすぐ上で小さな雲が蜃気楼のように浮かんでいる。

「でもさ、逆に言えば、二週間かければ自転車でもアメリカには辿り着けるわけでしょ。そういうのもいいんじゃない？　ラジオでもかけてさ、夕日が海の向こうに沈むのを眺めながらアメリカまで飛んでいこうよ。三六〇度海に囲まれた世界で、きつと夜は星空が綺麗

麗だよ」

「冗談やめてよ。途中で雨が降ったらどうするの。サービスエリアも何もないんだよ。トイレにだって行けない」

「夢がないなあ」

私は思わず笑い出した。真夜もつられて笑った。

「でも、そういうのもいいかもね」

真夜はそう言いながら結わえた髪をゆっくりとほどいた。秋の海風が黒く長い髪をなびかせる。私にはない、長い髪。

今まで私は真夜をとても遠い存在のように感じていたけれど、この大きな海を前にすると私たちは一人とも単なる少女に過ぎないのだと思った。

「そつえばさ」

振り返るとすぐそばのベンチの脇に真夜の自転車がとめられていた。

「さっきのあれ、空飛んでるところを人に見られたりしたら変な風に思われないかな？」

疑問を口にしながら、私はベンチに腰かける。

「気づかれないよ」

真夜も隣に座った。

「どうして？」

「そついう風になってるから」

髪の毛を結わえ直しながら真夜は言う。私は立ち上がると真夜の自転車のハンドルを握って言った。

「乗ってみてもいい？」

「いいけど、どうするの？」

「私も空を飛べるかなって」

言いながら、私はスタンドを蹴ってサドルに座った。ペダルをこいで勢いをつけたあと、思い切ってハンドルを持ち上げてみる。

前輪が少し持ち上がり、そのまま重力にしたがって落ちる。軽い振動がハンドルを握った両手に空しく伝わる。

「おかしい」

私は自転車を降りて元の場所に引き返した。

「どうして真夜は空を飛べるのに、私にはできないの？」

真夜はぼかんと呆気に取られたような顔をしていたが、しばらくしてこう言った。

「一輪車に乗れる人がいて、一輪車に乗れない人がそれを見て、その人が乗っている一輪車に乗ってみれば簡単に一輪車に乗れるようになるってわけじゃないでしょう？」

「じゃあ、私も訓練すれば空を飛べるようになるの？」

「ううん、それとも違う。そういう理屈じゃないの」

私は自転車をとめて再び真夜の隣に座った。

「自転車で空中を走るように空を飛ぶことができる。誰に見つかるともなく、不意に落っこちることもない……そんな絵を描いたの……絵？」

「そう。絵に描けばそれと同じことができるようになる」

真夜は海の向こうかあるいは空の向こうを見ながら、幼い頃にしたら怪我の記憶でも語るように、淡々と話した。

「ナイフとフォークと皿だけを用意して、あとは好きな食べ物の絵を描けば、それが皿の上に現れる。面白いでしょ？ 手間がかかる割に美味しくないからあんまり試さないんだけどね」

「食費にお金がかからないじゃん」

「同じことだよ。結局は何か他のものにお金をかけたり時間をかけたりしてる」

「はあ、なるほどね。それで手品ってわけだったのか。種も仕掛けもあるじゃん。嘘つき」

私は文化祭のときのことを思い出して言った。

「そう。種も仕掛けもあるの。でも手品自体に種や仕掛けがあるわけじゃないから、からくりを知ってなければ絶対に分からないですよ？」

「それってある意味、最大のいんちきだよ。もはや手品じゃないじ

「やん」

「そうかもね。でも私は、せっかくこんな力を身につけたんだから、どうせなら思いっきり人前で使ってみたかったの。手品ってことにすれば、誰も不審に思わないしね」

「それで私もまんまと騙されたわけだ」

「ごめんね。騙すつもりじゃなかったんだけど……」

そこで真夜は言葉を切って、続きの言葉を探すようにして一瞬視線をそらした。

「ほら、手品だからって思ってたいもつたいぶっちゃったの」

そんな風におどけて言う真弥の表情が、なんだか無理して笑っているような気がして、私は胸がざわついてきた。

「あ、いや、ごめん、別に怒ってるわけじゃないの、気にしないで。ただちよつと、全然気づかなかつたっていうか、そんな風には思ってたなかつたし」

「うん。だからね、今まで黙ってたけど、凜にも知ってもらおうと思つて、今日は誘ってみたの。だって、すごいでしょ？ 便利でしょ？ 隠してるのはもつたいたいじゃない。だから二人で目一杯この能力を楽しもうと思つてね」

なぜ今になって私に？ そんな疑問が浮かんだが、聞いてはいけないような気がした。私はこれ以上突っ込んだ質問をして真夜を困らせたくなかつた。

ざざ、と梢を揺らす風が吹き、足元の落葉を散らしていった。小さな木の葉が転がり、二人の足元をすり抜けていく。ふとそのとき、私は奇妙な異変を感じ取つた。

「真夜、ちよつとこつちきて」

私は立ち上がって道の真ん中あたりにきて言った。

「何、どうしたの？」

私に手を引かれるまま、真夜は私の隣に立つ。並んで立ってみると真夜は私よりもちよつと背が高い。

「やっぱり……」

太陽の日を浴びて、舗装された道の上に私の影が色濃く伸びていた。だがそれが、真夜の足元にはない。太陽の光はあたかも真夜がそこに存在しないかのように真夜の足元を均等に照らしている。

「ばれちゃったか……」

真夜は諦めたように話し始めた。私が何を問い詰めるまでもなく。「私ね、もうすぐ消えてなくなっちゃうの。それが一年後か二年後か、それとも明日かあさってかは分からない。だけど私は確実に毎日少しずつ消えていつてるの」

あたりが急に暗くなった。空が曇り始めて、太陽が雲の陰に隠れてしまったのだ。さっきまであんなに晴れていたのに。西の空を見るといつのまにか灰色の雲が広がっていた。

「消えてなくなる？ 何が？」

「何だろうね……私の姿？ 私の意識？ あるいはもっと別の何か？ 何が消えていつてるのかは私にもよく分からない」

真夜は再びベンチに腰かけた。空が曇ってしまったていて、私の足元にも影がない。

「影が消えてから気づいたんだけどね、体重計に乗ってみると体重がゼロなの。マイナス五キロでもプラス五キロでもなく、ぴったりゼロ。服を脱いでも変わらない。人の体には重さにして約一・五キログラムのバクテリアが住んでるらしいけど、彼らは一体どこへ行ったんだらうね」

私は真夜がまた何か冗談のつもりで突飛なことを言っているのだと思った。だけど自嘲気味に話す真夜の表情を見てその考えは打ち消された。

「朝目が覚めると、昨日までのことが夢のかけらみたいに不確かでおぼろげな記憶になってしまふ。それは本当にあったこと？ 私が私の中で実際に起こった出来事なんだって思い込んでるだけじゃないか？ って考えちゃう。洗面所に立つと鏡の向こう側に映っているのが自分だっという実感が湧かない。そこにいるのは誰？ それは本当に私？ 他の誰かじゃなくて？ 私はどこにいるの？」

湿気を帯びた、生暖かい風が足元をすり抜けていった。背後から聞こえる不規則な波の音がイヤに耳障りだった。空は今にも泣き出しそうな顔をしている。

「真つ白いキャンバスを前にするとね、私は私の世界を思い描くの。それから私は、私の世界を形にする。私の世界に色を塗る。そうすると今までの世界は新しい世界に塗り替えられていって、古い世界はどんどん塗り潰されていってしまっ」

真夜は小さくため息をついて、耳の裏をかいた。そのとき真夜の左手の薬指に小さなほくろがあるのが見えた。真弥の手のそんなところにほくろがあるのを私はこのとき初めて知った。

「そうやっていつの間にか元の姿を失っていったのが、今の私」
ぼつ、と雨粒が頬に当たるのを感じた。

私は何も言えなかった。努めて冷静に、客観的に真夜の言っていることを理解しようとしたけれど、それは難しかった。今日はあまりに多くのことが起きすぎた。私は私の中でまだ上手く物事の整理ができていないのだと思う。

しばらく沈黙が続いた。

じつと目を合わせる真夜の瞳はなぜだか贖罪を求めているように思えた。私はどんな表情をしているのだろう。私は自分が何を考えられているのか分からなかった。何を考えればいいのかも判然としなかった。

広葉樹の葉を雨粒が打つ音が聞こえてきて、そこで私は考えるのをやめた。

「真夜」

私はなるべく優しく丁寧に真夜に話しかけた。

「雨、降ってきてるよ。早く帰ろう」

やっとのことで出てきた私の声は、小さくかすれて消え入るようだった。

その夜、私は奇妙な夢を見た。

私の体は、腰から下がらない。そんな状態でどうやって生活しているのかというと、私は宙に浮いているのだ。丁度、足があるときの身長と同じくらいの高さで。階段を上るときも、外を移動するときも、ずっと私は空中に浮かんで動いている。だがあるとき、私はどこかのアパートのような建物の階段から、足がないのに足を踏み外して落下する。地面に叩きつけられた私はなぜか起き上がることができず、そのまま地べたに這いつくばる。必死に両腕で地面を這って移動しながら助けを求めようとして、そこで私は目が覚めた。

パジャマとシーツが汗でびしょびしょになっていた。私は部屋の中に何者かが潜んでいてこちらの様子を窺っているような気がしたので、そのまま毛布を頭までかぶってしばらく布団の中にもぐりこんでいた。不意に目覚まし時計のけたたましい音が鳴り響き、私の体は驚きのあまりびくびくと震え上がった。私は時計ごときに驚かされたのかと思い恥ずかしくなりながら目覚まし時計の音を止めた。私は起き上がってから自分の足元にちゃんと影があるのを確認した。体重計にも乗ってみた。異常はない。よかった。私は安堵の息を漏らした。

その日、私は授業に身が入らなかった。

放課後、美術室に入ると真夜の姿を見つけて私は心底ほっとした。

「私、あれから考えたんだ」

机に荷物を置くくなり、私は真夜に話を振った。

「真夜が、絵に描いた世界を実現させる力があるっていうんなら、真夜が消えてなくなったりはしないっていう世界を絵に描けばいいんだよ」

「そうは言っても、難しいよ」

真夜はいまいち腑に落ちない様子で言う。

「真夜はその不思議な力を使っていてるせいで、自分が消えてなくなっちゃうそうになってるわけでしょ？ 違う？」

「断定はできないけれど、私もそう思ってるし、凧の言う通りだと思っ」

「だから、『真夜はもうその能力を使わない。今後、真夜の書く絵はただの絵で、その絵に描いた世界が現実のものとなったりはしない』っていう絵を描けばいいんだよ」

「なるほど……」

真夜は深くうなづいて考え込み、やがて、希望に満ちた笑顔でこう言った。

「それで上手くいきそうな気がする」

「でしょ？ それなら早速描き始めようよ！」

一条の光をつかんだ私は嬉しくなってその場で飛び上がりそうになった。

「ちょ、ちょっと待ってよ。まだどんな絵にするかも考えてないし

……」

「ほらほら、私も手伝うからさっ」

そう言いながら真夜の背中を押す私の影は美術室の床の上で小躍りするようにはしゃいで見えた。

「あかさ、真夜」

「何？」

「今度、色の塗り方教えてよ」

「え？ いいけど、凧だつて充分上手いじゃない」

「真夜の塗り方が知りたいんだつてば。ね、いいでしょ？」

「私は凧の描く絵も好きだけどなあ……」

小鳥が二羽、窓際にとまってさえずりながらじゃれ合っている。

秋はまだまだ、深まっていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0872o/>

呪われた少女の空

2011年9月30日03時16分発行